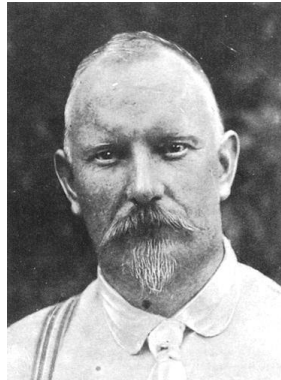


# 『Mind Charging』

第 111 回 発行：入試広報室 発行日：令和 2 年 9 月 12 日

## ジュール・ルナールの名言



**When the defects of others are perceived  
with so much clarity,  
it is because one possesses them oneself.**

他人の欠点というものがはっきりと目についてわかるのは、

そもそも、我々自身にそういった欠点というものがあるからなのである。

この言葉から感じたことは、『やはりみんな不安なんだ』ということです。自分の欠点は自覚している人がほとんどで、同じような欠点を持つ人を見ると『良かった！自分だけじゃないんだ！』と、それが欠点の解消とは全く関係ないのは理解していても、どこか安心しますよね。しかし、大切なのは“その後” だと思います。そこで得た安心感は本物ではないわけで、解消できた方が自分のプラスになることは明白です。解消するための努力を重ね、見出した(インプットした)解消法を仲間たちと共有(アウトプット)することによって、大切な仲間には有益な情報を与えられるだけでなく、自分の理解をさらに深めることができます。欠点としっかり向き合える自分でありたいものです。(編集委員：入試広報室 鈴木)

ジュール・ルナール(Jules Renard、1864年2月22日 - 1910年5月22日)は、フランスの小説家、詩人、劇作家。その小説『にんじん』は有名。簡素で日常的な言葉を使いつつも、鋭い観察力をから様々な優れた作品が生み出された。1864年にマイエンヌ県シャロン＝デュ＝メーヌ(フランス語版)に生まれる。父親のフランソワ・ルナールは地元の役人であった。1894年に『ぶどう畑のぶどう作り』『にんじん』を発表。1896年に『博物誌』『愛人』をリリース。1897年には散文劇『別れもたのし』を上演。この劇は大成功を収め、一躍ルナールは一流作家の仲間入りを果たした。しかし、1897年には父親が病を苦しんで猟銃自殺を果たし衝撃を受けた。翌年に『別れもたのし』は出版された。やがて政治にも興味を持つようになり、社会主義的な傾向が現れる。1898年に『パンの日々』と『牧歌』を出版。(Wikipedia 参照)